INFORMATION

寺子屋トーク

ホリスティック教育フォーラム「学び＝つなぐ力」

第22回の寺子屋トークは、日本ホリスティック教育協会との共催で開催します。

今回は、ワークショップあり、分科会ありと、通常の寺子屋トークとは違い、盛り沢山の内容。世話人である金香百合さん（大阪YWCA）、吉田敦彦さん（大阪女子大）が、フォーラムの全体をしめくくります。

引き裂かれた混沌の時代を生きる力とは何か、今、学校、地域に求められているものは……。

各地各領域の実践者とともに、教育のあるべき姿を語り合います。

◆　◆

○日　時／6月10日（土）　10時開始（17時終了予定）
○会　費／会員1000円（一般2000円）
○主　催／日本ホリスティック教育協会
○共　催／應典院寺町倶楽部

※詳細は同封のチラシをご覧ください。

第21回寺子屋トーク
児童文学が拓く世界

去る2月9日、第21回寺子屋トーク「どんぶらこっこ〜いのちをはぐくむ児童文学〜」を開催しました。講師は、埼玉大学教授の安達忠夫さん。参加者48人。

児童文学の巨匠ミヒャエル・エンデの研究家としても活躍されている安達さんは、自ら5人の子どもを育てた経験をおもちで、「子どもたちが成長していく過程で“ことば”の持つ意味は大きく、子どもたちに語りかけることや本を読み聞かせることは大切」だとおっしゃいます。

なぜなら、人間と他の動物との決定的な違いは“ことば”で、幼いときにことばの環境がしっかり与えられていないと、人間的な生き方や考え方ができなくなってしまいがちだからです。それは、けっして早期教育を意味するのではなく、「どんぶらこっこ、どんぶらこ」という繰り返しを子どもが好むことからもわかるように、からだ全体でリズムを受けとめ、チョウチョやトンボを追うようにことばを追いまわす経験が大切なのです。

意味を理解することは後回しでいい、語りかけや読み聞かせによって子どものこころを深く耕してほしい、と安達さんは言います。

また、「意味が理解できるようになれば、想像の世界で主人公と冒険をともにし、思いやりや勇気を学びます。さらに、何のために生きるのか、と自分の生きる意味を模索しはじめるのです」と、読書の意義を語られました。

さまざまな物語を紹介しながらお話は進み、いままで気づかなかった“作者の思い”や“深さ”も知ることができました。子どもの頃に読んだ本をいま読み返してみれば、きっと新しい発見があることでしょう。

交流事業
夜桜会が盛況！！

今年度最後の交流事業、夜桜会が4月5日に開催されました。あいにくの小雨模様にも関わらず、25名もの方が参加してくださいました。

まだ八分咲きながら、ライトアップされた桜の美しさに、会話もお酒も？弾みました。

総会は6月に開催の予定

会員総会は、6月に開催する予定です。昨年と同様、参加型の総会にしたいと考えています。

詳しいご案内は、あらためてお送りしますので、ぜひご参加いただきますようお願いいたします。

【新入会員ご紹介】

（1999年4月14日まで）

2月15日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【神奈川県】
東村　武二　厚木市
【大阪府】
栗畑　静枝　大阪市天王寺区
熊谷　育子　大阪市西区
南　吉一　枚方市
大橋　信雄　和泉市
【奈良県】
植田　啓子　奈良市
○賛助会員
【大阪府】
比良野光彦　大阪市中央区
【岡山県】
中原　実道　総社市

サリュ　VOL. 19
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2000年4月15日
（偶数月発行）
編集人　池野亮、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543−0076
大阪市天王寺区下寺町1−1−27
TEL06−6771−7641
FAX06−6770−3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2000 APRIL
vol. 19



「今年はあったかくて2月にふきのとうを見つけたけど、いま食べるとからだがゆるむと思ってやめたの」と、東北で羊と暮らしている友人が言った。季節の変化をじかに感じることが少なくなった分、からだの声に耳を傾けようとすることも忘れてしまったような……。

春だから何か新しいことを、とがんばることもない。ふわ〜っと肩の力を抜いて、春の風にふかれてみようか。それぞれのペースで……。

「いのち」の文化を創り出す試みを

～1999年度寺子屋トークをふりかえって～

'99年度、開催された寺子屋トークは計6回。さまざまな分野で活躍されているゲストをお招きし、"いま"を語っていただきました。福祉・医療・教育・宗教など、多様な切り口のお話から浮かび上がってきたものは何か。4年目を迎えるにあたってこれまでのトークをふりかえり、これからの方向性を探ってみたいと思います。　（文／川井田祥子）

原点を問い直してみれば

「こころの文化の拠点」をめざしてオープンした應典院は、今春3周年を迎えました。原点をふりかえってみようとスタート当初の発行物をひもとき、キーワードを拾ってみました。「應典院は目的のない時間と空間」「大事なものに気づくため、ぼくたちは勇気をふるって立ち止まる」。これらの言葉に込められた思いは、アジール（避難所）としてのお寺の機能を果たそうという決意と、「日常生活での役割や肩書をはずし"素の自分"と向き合ってみませんか」という提案です。

つい最近まで私たちは「目的に向かって努力する＝善」という価値観に縛られ、合理性や効率性ばかりを追い求めていなかったでしょうか。もちろん、それが悪いと言いきることはできませんが、走り続けてきた一本の道からこぼれ落ちたもの、見えなくなってしまったものにも、大切な何かがあるように思います。

「文化（Culture）」の語源は「耕す（Cultivate）」。一本の道をがむしゃらに突き進むだけでなく、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら、自分の大切なものを見つけようとする人々が集い、耕す作業をしはじめる……それが應典院の最初の願いでした。

「ひとは、あなたに出会ってわたしになる」

耕しはじめるきっかけの一つとして、應典院寺町倶楽部が開催しているのが恒例の寺子屋トーク。應典院を舞台に、昨年度末までに開催した回数は計21回。テーマを限定せず、「～のために」といった目的も掲げずに開催してきたのは、多くの異質なものが出会う場にしたいと考えているからです。福祉・医療・教育・宗教といった枠をはずし、違う視点から光を当ててみる。そうすれば「私には関係ない」と思っていたことでも、「じつは大いに関係があった！」というような発見があるかも知れません。また、ゲストの話を聞いて感じたことや浮かんだ問いを掘り下げていけば、自分がいまどこに立っていて何を大切にしているかが見えてくるでしょう。耕す作業はそこから始まっていくのです。

一人ひとりの気づきを大切にしたい――そんな主催者側の思いをゲストの方々はくみとってくださり、「こうあるべき」という答えではなく「あなたはどう思いますか?」という問いを投げかけてくださいました。それらを少しふりかえってみましょう。



新たな価値観の問いかけ

橋口譲二さんが投げかけたのは、「あなたはどんな距離で他者と関わっていますか?」ということ。他者と真っ正面から向き合うのはとてもエネルギーのいることです。けれど、傷つくことも傷つけることもできる距離になって初めて見えてくるものがあり、他者の存在によって自分の価値観がどこにあるかという物差しが確認できます。そしてそういう関係の中で物差しを変え続けていくことが、"いまを生きる"ということではないでしょうか。

立ち見が出るほど盛況だった「ノストラダムスをぶっ飛ばせ！」。宗派を越えて集まった5人の仏教者が投げかけたものは、「従来の価値観や制度が崩壊し、多くの人が支えにしていたものがなくなった現代をどう生きるのか。今までのように何かに頼って思考停止してしまうのか、自分の頭で考え行動してくことを選ぶのか、それとも……?」。

横川和夫さんからは、「何かができることで評価される課題達成型社会は終わりを迎えようとしています。失敗やぶつかり合いなど、今まで問題だとされていたものの中に、これからの方向を見きわめるヒントがあります。問題を排除するのではなく受け入れる、そんな価値観の転換をしてみては?」という提案。

森栗茂一さんは、「"社会"というとなんだか抽象的で『誰かがなんとかしてくれる』というイメージをもたれがちですが、一人ひとりが『自分も社会の一員だ』という自覚をもつことが、いま大切なのではないでしょうか」とおっしゃいます。

「文化」の意味の再定義を

他のゲストからも、それぞれの立場での問いかけがありました。共通しているのは、一人ひとりの生き方であり価値観です。問いかけられた側が自分の言葉にして他者と語り合い、また考える。そういったくりかえしの中でこそ、文化は生まれてくるのではないでしょうか。なぜなら、「文化」とは自分なりの価値観をもった個人と個人が、つながりあって生きていくための「結び目」ではないかと思うからです。

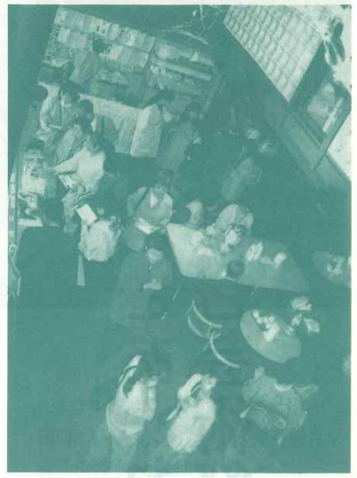
もちろん、「文化」の解釈はさまざまで、「そんなのは文化じゃない」と思われる方もいらっしゃるでしょう。実際、「文化」という言葉ほどあいまいで、一人ひとりのイメージがバラバラでありながら、わかったつもりになりやすい言葉はないと思います。でも、だからこそ、その意味をみんなでもう一度定義してみたいと思うのです。

寺子屋トーク以外にも、毎年秋に開催している「コモンズ・フェスタ」は、生き方や価値観の違うもの同士の出会いから、新たな文化を創造していきたい、もうひとつの"共"のコミュニティを形成していきたい、という思いから生まれました。

開催の形式は違っても、根っこにある思いは一つ。より多くの人と出会っていけるよう、これからも新しい試みが展開されていく予定です。

傍観者から当事者へ

今年の12月24日にお招きするジャーナリスト・辺見庸さんは、著書『不安の世紀から』（角川文庫）の中で現代を「頼るべき思想も物語も言葉もなく、自分の存在を証明することができなくなった時代」だと定義し、不安の原因をていねいに探っていきながら新しい世紀を展望する試みを続けておられます。



21世紀はもう目前。新しい文化を創り出していくことができるのか、それとも不安感を引きずったまま迎えるのか。傍観しているだけではなく、あなたも一緒に語り合ってみませんか？　今後のさまざまな催しへのご参加をお待ちしています。

'99年度 寺子屋トーク開催記録

◆1999年

5月　「写真家・橋口譲二の仕事」
写真家　橋口譲二
参加者のべ230名

6月　「大いなるものに生かされる」
教育学博士　伊藤隆二
参加者60名

7月　「ノストラダムスをぶっ飛ばせ！」
仏教者　高橋卓志、梶田真章、清　史彦、杉若恵亮、竹内純照
参加者209名

9月　「教育・競争から共生へ」
ジャーナリスト　横川和夫
参加者52名

11月　「日本人の死に方大論争！」
大阪大学教授　大村英昭
医師　神代尚芳
大阪外国語大学助教授　森栗茂一
繁昌花形本舗代表　塚村真美
参加者115名

◆2000年

2月　「どんぶらこっこ」
埼玉大学教授　安達忠夫
参加者48名

累計714名

EVENT REPORT

若さあふれるアーティストたちの競演、舞台芸術祭がにぎやかに開催さる!!

応典院の柿落しとして開かれたイベントが、2000年を迎えたのを機に「シアトリカル應典院舞台芸術祭SPACE⊠DRAMA2000」と装いも新たに1月8日～2月27日開催されました。

新年にふさわしく、新しいスタイルで企画された舞台芸術祭。約2ヵ月の間に延べ約1800人もの観客が集まったこのイベントの目玉の一つは、各劇団が公演の中で開催したシンポジウム。應典院という「場」を介して生まれる「つながり」を一貫したテーマとし、若さあふれるアーティストたちの競演とともに、大いに会場を盛り上げました。

舞台芸術祭公演のトップバッターは実績No. 1、南船北馬一団の「ほら　そら　ごらん」。学童保育に携わる若者たちのさまざまな想いが交差する舞台は、作・演出である棚瀬美幸の持つ世界観の"自立"がずっしり重く伝わってくるようでした。

2番手はいま、飛ぶ鳥を落とす勢いである売込隊ビームの「お気楽ショートストーリー集」。3本のオムニバスで構成され、あらさはあるもののイキイキとした役者たちが楽しく舞台に立っているという、お芝居本来のおもしろさを感じることができました。

3番手にはT. M. R. プロデュースの「モンテカルロの雪降る一月」。モンテカルロ商店街内の花屋の対立を描いたこの作品は、應典院という「場」をうまく生かし、計算されつくした演出、脚本をクオリティの高い役者たちが躍動するという、観る側を飽きさせない極上のエンターテイメントとなりました。

続いて劇団メロディアスメロンの「ガリバーのうなじ」大改訂版。ガリバーの息子だと名のる少年たちと父親に捨てられた青年のそれぞれの父親観の違いを言葉遊びとたえず動き回る演出で、これからの可能性を期待せずにはいられない舞台となりました。役者の勢いはどこにも負けないという気概がひしひしと伝わってきました。



大トリはThe Stone Ageの「赤い男」。とある遊園地のキャラクターショーの舞台裏という特殊なシチュエーションの中で、一風変わった個性の持ち主たちがショーの存続を賭けて右往左往するという関西では珍しいコメディタッチの一場一幕モノでした。

以上がこの演劇際に参加した5団体の公演内容です。



おのおの上演後、シンポジウムが開催されました。出席者は秋田住職、各団体の代表者5名、さらに大阪市立中央青年センターの花立都世司さんにも参加していただき、劇場のオーナーと表現者というそれぞれの立場から、「つながり」というテーマを見据え、演劇を続けていく上でのつながりやホールと劇団とのつながり、寺院と演劇とのつながり、一個人として應典院とどうつながりを持つか？などを話し合い、どれもが45分という短い時間では話しつくせない、とても内容の濃いシンポジウムとなりました。

2月27日に行なわれたクロージングプログラムでは、まず劇団青い鳥主宰の芹川藍さんによる演劇ワークショップ「からだでココロを考える」が開かれ、自己の内面の解放や、個々が持つ個性の表現の仕方など、役者だけではなく日常生活を送る上でも必要な表現というものを熱心に指導していただきました。

その後、演劇プロデューサーである津村卓さんを囲んでトークセッション「共空間で出会う人、ヒト、ひと」が催されました。

扇町ミュージアムスクエアや伊丹アイ・ホールの設立に携わってこられた津村さんは、現在の公共のホールについて「一見多様化されたニーズに応えているように見えるが、本当の意味でのコモンセンスを持っているわけではなく、應典院のようなホールがその役割を担っている」と語られました。さまざまなホールを例にあげながら、津村さんと関わりのあったホールや劇団がどのように成長していったかなどのお話や、また、應典院という「場」と演劇とのこれからの可能性についてのお話は、若い演劇人たちにとって熱いエールとなりました。



2ヵ月にわたって開催された「シアトリカル應典院舞台芸術祭SPACE⊠DRAMA2000」は、まったく個性の違う5団体が参加したことによって舞台表現の幅の広さを感じさせてくれました。来年はまた新たな企画で應典院という「場」の可能性を広げてくれることでしょう。

表現者としての原点に戻れた演劇祭

劇団メロディアスメロン　桂正樹



「何かを表現する」。これはもうとても大変な作業でして、これのすべてをさらけ出さなきゃ誰も認めてくれないんです。ところが演劇を始めてからの10年という月日は、柔らかな半透明の膜となって眼の前にあるその事実を包んでしまっていたんです。僕もそれに乗じて盲目であり続け、「この作品は本当に自分のやりたいことじゃない」と心に言い訳をして過ごしていました。これはもう表現者として致命的な問題で、よほどのことがないかぎり表現者の底をさまようゾンビになってしまうところでした。

しかし、出会いというのは不思議なもので、こうまで人間を変えてしまうのかとつくづく感心してしまいます。ひょんな事からつき合いが始まった應典院は、なんと僕を一人前の表現者として迎え入れてくれました。

いままで接してきたホールというのは借り手と貸し手の関係だけだと断言できます。でも、幸か不幸か應典院はそういうドライな関係を望んではいません。「僕は演劇に関しては素人ですから」というのが口癖の秋田住職のマナコの奥には、「でもお客さんのほとんどが素人なんだ」という気持ちを感じずにはいられなかった。そんなマナコを向けられたらこっちもそれ相応の覚悟が必要だぞ、と演劇祭の準備期間である1年間、僕は僕なりに勉強しました。学ぶ姿勢があればこそ、おのずと出会いも増え、そこからまた学ぶ、なんていうまさに「学びのネズミ算」は、先に述べた柔らかな半透明の膜をゆっくりひっぺがしてくれたんです。

表現者としてのスタートラインに改めて立てた今回の演劇祭。これでやっと棚瀬美幸（南船北馬一団）や城田邦生（T. M. R. プロデュース）に追いついたぞ、としたり顔で公演を覗きに行くと開いた口が塞がらない。あいつもこいつも恐ろしいスピードで成長しているんです。時間が僕だけのためにあれば良かったのにと、ワケのわからない悔しさを胸に秘めつつ、必ずもう一度この應典院で演劇際に参加しよう、そして住職のマナコを真っ赤に充血させてやろうと、そんな決意をした今回の演劇祭でした。

應典院と出会った表現者たちにとって、この演劇祭が一つの区切りであったことは間違いありません。僕自身が経験者だからはっきり断言できます。

ですから今後、新たに應典院と出会う表現者たちのためにも演劇祭という一大イベントの火を燃やし続けていってほしいと願っています。

CLUB TOPICS

4年目の寺町倶楽部にもぜひご協力を！会員継続をお願いします！！

4月を迎え、年度最後の月となりました。

今年度も、充実した主催事業が展開されました。新たな取り組みの市民活動サポート事業、多くのNPOとともに創りあげた11月のコモンズフェスタ'99、若い演劇人たちが中心となって運営を行った1・2月の舞台芸術祭、そして今年度は6回行われた寺子屋トーク。こうして主催事業を振り返ってみると、多くの出会いから事業の姿が生まれていったように感じます。

会員のみなさんにも事業への参加や運営など、さまざまな形でかかわっていただき、3年目になって、ようやく活動が本格化してきたように思います。

なかでも、今年も参加者が主体的に運営してくださった年3回の交流事業では、会員と一般参加の方々との多くの出会いが生まれ、倶楽部を中心とした輪が、少しずつですが広がっているように感じます。

石の上にも3年……といいますが、4年目になる次年度は、倶楽部にとって大切な年になるのではないでしょうか。3年間の活動を振り返り、今後の活動の方向性をもう一度構築し、さらなる飛躍をめざすことが必要になってきます。

今までの成果に甘んじることなく、事業に対する自己評価から、もう一度「市民文化とは何か、何を社会へ向けて発信するのか」を捉え直していきたいと考えています。

具体的な次年度の活動方針は、現在検討中ですが、近々に理事会を開催、6月に開催予定の総会にてご報告いたします。

4年目の寺町倶楽部の活動にもご協力をお願いします。そして、ぜひさまざまな事業にご参加ください。倶楽部の活動が、よりよい社会づくりへと将来的につながっていくためには、会員のみなさんのさまざまなかたちでの参加が大切になってきます。

倶楽部の収入は、ほぼ100%が会費収入です。5月からいよいよ4年目がスタート、全会員の約7割の方が会費の更新時期にあたります。

次年度も会員の継続をどうぞよろしくお願いします。5月が更新時期となる方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたしますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いします。

VOICE ボイス

今回のVOICEは、石黒良彦さん。石黒さんは6月から「いのちと出会う会」を應典院にて開催される予定です。いろんな人に知ってもらいたい、長期的にじっくり考えていきたいテーマなので、應典院との関わりについて期待されています。



私は12年前に5歳の次男を、3年前に妻を亡くしました。当時次男はバドマ幼稚園に通っていて、葬儀を隣の大蓮寺で、妻の一周忌遺作品展を應典院で行なわさせていただいたご縁で会員になりました。

2人の死に直面し、「2人の人生は何だったのか」「2人の苦しみは何か意味があったのか」「次の世で2人は元気に暮らしているか」など、問いがかけめぐりました。そして答えを求めて学び、感動した話、納得した話を、縁ある方々に伝えてきました。遺族の方、闘病中の方、人生を真剣に考えたい方……多くの方々とともに考え歩みたいという気持ちから、大阪市内でもこのような集いを立ち上げようと考えました。初めての経験ですが、恥をかきながら、みなさまに教えていただきながら、始めていくつもりです。

ここまで到るには亡き2人の導きがあったと感じ、感謝しています。「ぼく、何も悪いことしてへんのに、何でこんな苦しまなあかんの?」と次男・邦之は生を問い、妻は病院を去るとき、次男の遺体を抱きながら「くー君やっと外に出れたね」とつぶやき、死を受け入れました。これが私の原点です。

今、満ち足りて逆に生きる力を失っているこの時代に、いつか来る自分の死を見つめて、生きる意味、生きがい、自分の夢、さらに老いや病いといったものを参加者がともに語り合えたらと思っています。

お寺は、昔は病院であり学校であったのに、今は葬式のみになっている。仏教は死んだ人のためではなく、生きている人のためにあるべき。まさに應典院は生と死を考えるにふさわしい、本来のお寺の姿ではないでしょうか。人々が人生の問題について悩める場所、解決するきっかけができる場所であってほしいと願っています。

秋田住職発 應典院掲示板

春は別れの季節。先日、地元中学校の卒業式に出席、卒業生たちに祝辞を述べる機会がありました。「世界や歴史は外野席で見物するものではない。自らの手で参加して作り上げていくもの」。巣立っていく160名の少年少女たちにメッセージが届いたかどうか心もとないかぎりですが、満座の視線を浴びながら、身の引き締まる体験でした。

式中、卒業生たちが「別れの歌」を歌うあたりから、あちらこちらで涙を拭う姿が。問題の多い年頃といわれますが、ひとりの人間が生まれ変わっていく姿は、年齢に関係なく同じ感激を呼び起こします。

去りゆく者、送る者、そしてそこに立ち会う者。相互の関係が響きあい、卒業式は最高のドラマとなります。改めて儀式の持つ力に感じ入ったひとときでした。

■なにわ人形芝居フェス盛会

春爛漫、去る3月26日、下寺町一帯で「第4回なにわ人形芝居フェスティバル」が盛大に開催、約2万人の人出でにぎわいました。



應典院は人形芝居の上演会場として、糸あやつり人形劇団として有名な「みのむし」ほか3劇団の公演を行いました。当日はウォークラリーやバザーの参加者も多く、北の玄関として應典院・大蓮寺の境内は終日ごった返しました。

当日ボランティアのみなさん、お疲れさまでした（写真は、應典院屋上から上がったアドバルーン）。

■春の巡礼バスツアーにどうぞ

恒例の法然上人25霊場巡拝バスツアー、5回目の今回は、来る5月21日（日）、霊場中最も難所とされる愛宕山の月輪寺をはじめ嵯峨野の法然寺、小倉山の二尊院を巡拝します（月輪寺を参拝されない方のための嵐山散策も予定しています）。

昼食は清涼寺釈迦堂内の竹仙で名物の精進湯豆腐料理を頂戴します。参加はお一人12,000円。初めての方も歓迎ですので、5月8日までに当山までお申込みください。

■綾田直子さん退職

97年のオープン以来、應典院の受付の顔として活躍してきたスタッフの綾田直子さんが、このたびめでたく結婚退職されることになりました。

「3年間、ここでいろんな人と出会って、人間を見る目が養えたように思います。外の社会と違って、人のあたたかみが伝わってくる感じ。私自身、どこに出ても素直にコミュニケーションできるようになれたことに感謝しています」。

もてなしの心とにこやかな笑顔が應典院の評判のひとつでしたが、これからは新しい人生を幸せに送ってくださることをお祈りします。

後任スタッフは4月3日より参加の予定です。

■春の講座で、写仏をやろう

今年も春の講座として写仏講座を企画、講師はお馴染みの真言宗常福寺の松尾光明さん。一筆ずつ仏さまのお姿をなぞりながら、仏教のお話に耳を傾けてみませんか。初心者歓迎です。

○日程
5／22、6／5、6／19、7／3

○参加費
各回2,000円

※当山までお申込みください

■トークサロン休会

長い間、親しまれてきた恒例のトークサロンを、3月をもってしばらく休会とします。

「出会いの場」を目的に毎月恒例のトークサロンは、應典院の看板行事のひとつでしたが、当初の目的はほぼ達成できたことと、お寺らしい出会いの場へ生まれ変わる機運が生じたため、いったんお休みすることになりました。新たに「いのちと出会う会」として、6月頃から再開する予定です。

これまでご参加いただきましたみなさんに心から深謝申し上げます。

應典院で初めての“故人とお別れの会”

去る3月13日、應典院で初めて故・佐野和子さんお別れの会を開催しました。地元のご縁で佐野家よりご相談があり、会場としてご提供しました。

佐野さんはご夫婦そろって、京都の東寺にて「生前葬」を勤め、戒名もすでに授かっておられる熱心な仏教信者。お葬式ではなく、近親者だけのお別れ会となりました。故人が好きだった「上を向いて歩こう」が流れる中、一人一人献花をして弔意を表わしました。



應典院では初めての、花に飾られた祭壇も、お別れの会にふさわしく清々しいものでした。